

人生劇場（付、口上）

作詞（一）三 佐藤惣之助

口上 青島流

早稲田の杜もりが芽吹く頃 花の香りは沈丁花

人生意気に感じたら びくともするなと銅像が びくともせずに風に立つ

崩れかかった築山つきやまは 江戸の昔の高田富士

町を見下ろすてっぺんで 意気に感じた若者が 夕陽に向かって吼ほえていた

春と一緒に青春の 波がどんどん押し寄せて あゝ人生のローマンス

男子おのこばかりか女子おなこまで 杜の宴に酔いに来る

昨日も聞いた今日も見た 早稲田の杜あわなりしやうきちに青成瓢吉あせやうきちが出るといふ

尾崎士郎原作『人生劇場』より

あゝ、歡樂は女の命にして 虚榮は女の真情であります

わずか七日ばかりの享楽を得んがため

哀れ美しき乙女の貞操は 犠牲に供せられたのであります

覆水盆に帰らずの例えあるが如く 親を欺きし罪 いと深きかな

あゝ哀れ メリーさんは チンタッタチンタッタ

一、やると思えば どこまでやるさ それが男の 魂じゃないか

義理がすたれば この世は闇だ なまじとめるな 夜の雨

君見ずや荒川土手の緑 緑また緑のその中に 一点紅くれなゐを点つずる者あり

その名をお袖という

月良し 酒良し お袖更に良し

その時かの熱血漢 新海一八しんかいいっぽちは眩つぶやいたのであります

我が胸の 燃ゆる想いに 比ぶれば

煙は薄し 桜島山

二、あんな女に 未練はないが なぜか涙が 流れてならぬ

男ごころは 男でなけりや わかるものかと あきらめた

頃は 大正の末年 夕風のいと寂しき処は 三州横須賀村

印 半纏もじりの外套

雪駄に 乗せたる身もいと軽く

帰り来たりしは 音にも聞こえし 吉良常なり

三、時世時節は 変わるとままよ 吉良の仁吉は 男じゃないか

おれも生きたや 仁吉のように 義理と人情の この世界

ああ夢の世や夢の世や 今は三歳のその昔

いとなつかしき父母や 十有余年がその間 朝な夕なに眺めたる

春は花咲き 夏茂り 秋はもみじの錦衣 冬は雪降る 故郷の

生まれは正しき郷士にて 一人男子と生まれたる

宿世の恋のはかなさか その運命の悪戯か

浮き立つ雲に誘われて 一人旅立つ東京の

学びの庭は 早稲田なり

四、^{はした}端役者の 俺ではあるが 早稲田に学んで 波風受けて

行くぞ男の この花道を 人生劇場 いざ序幕

※口上の中には、現在では不適切と思われる表現も含まれますが、原作『人生劇場』著作当時の時代背景に鑑み、あえてそのままにしています。

※動画は、「YouTube」<https://youtube/yXCajS0L3Xc> または検索「人生劇場 青島」でご覧ください。



2017年遠州稲門会総会

はじめに

早稲田大学を出た人には母校を愛する気持ちの強い人が多い。もちろん、どここの学校に
おいても卒業生が母校に愛着を覚えるのは珍しいことではない。普段は意識していなくて
も、もし出身高校が甲子園に出るようなことになれば、その勝敗が気になるはずだ。

しかし、早稲田の場合、その度合いが並外れている。校歌「都の西北」は卒業生なら歌
えて当たり前。歌えないと珍しがられるという現象は象徴的である。そんな大学は、日本
どころか海外にもないらしい。

そのような早稲田においても、青島秀樹氏ほど早稲田に惚れ抜いている人を見付けるの
は難しい。とりわけ、早稲田の第二校歌と称される「人生劇場」の口上(台詞)を学生時
代から四〇年近くも語り続け、日夜その研鑽に努めている人は、おそらく青島氏の他にあ
るまい。それも単なる余興的遊び心ではない。真剣に打ち込んで、そのことに生涯をかけ
ているのだから恐れ入る。二〇一五年二月、大隈会館において「人生劇場」口上青島流家

元認定式が挙行され、その発起人代表を務めさせていただいたとき、そのことを確信した。

これほど純粹一途に早稲田と「人生劇場」にのめり込む男が、いかにして生まれたか。彼の半生を明らかにして、その謎解きをしてみたいという思いに駆られた。それが本書執筆の偽らざる動機であり、謎解きの答えとしてまとめたのがこの本である。

二〇一五年九月三〇日は秀樹氏の還暦の誕生日だった。そのお祝いの気持ちも込めて半年ほど前から書き始めたのが本書だが、公私にわたって諸事多端。その日に間に合わないどころか、大幅にずれ込んでしまった。このほどようやく大学卒業までの経緯は何とか書き上げるに至った。いわば秀樹伝の「青春篇」であるが、謎解きの解答にはなっていないであろう。

また、青島流家元後見人の立場としては、このような一書を公刊することも、その務めかと自認する。読者諸兄諸姉の皆様に、家元秀樹氏の真価をご理解いただけるなら幸いである。

取材にあたっては本人の自己申告を主とし、友人・家族・関係者の証言を得るべく務めた。当初はなるべく広い取材をと心がけたのだが思うに任せず、結局本人の素稿に頼った部分が多い。それでも十分客観性が認められると判断したのと、表現力のレベルが高いと

評価できたので、その手段に甘んじた。

驚くべきことに、送られてくる素稿の文体が、次第に私の文体に近づいてきた。もちろん、そのすべてにわたって手を入れたので、最終的には私の責任とは言え、本人の表現が随所に生きていることを明らかにしておきたい。

二〇一七年八月

林和利

人生劇場（付、口上）

ii

はじめに

vii

プロローグ

1

第一章 少年期

1 誕生と両親

8

2 幼少期

10

3 父の思い出

11

4 幼稚園の頃

16

5 ピアノのレッスン

18

6	小学生の頃	20
---	-------	----

第二章 中高生時代

1	長兄と次兄	28
2	中学時代の逸話	33
3	早稲田へのあこがれ	37
4	死についての思索	41
5	高校入学時の失望	43
6	高校時代の悲惨な成績	46
7	早稲田志望一直線	51

第三章 早稲田大学一年生

1	入学式当日	60
2	応援部歓迎会	64

第四章 早稲田大学二・三年生

- | | | |
|----|--------------|-----|
| 3 | 「応援部」の歴史 | 67 |
| 4 | 応援部歓迎会翌日 | 71 |
| 5 | 石塚荘の住人 | 76 |
| 6 | 応援部新人としての活動 | 81 |
| 7 | 応援部の挨拶と集合 | 95 |
| 8 | 「人生劇場・口上」の感激 | 98 |
| 9 | 「人生劇場・口上」の工夫 | 103 |
| 10 | 演奏旅行・演奏会・納会 | 112 |
| 1 | 早稲田大学遠州人会 | 122 |
| 2 | 遠州人会の活動 | 136 |
| 3 | 早稲田大学浜松演奏会 | 138 |
| 4 | 吹奏楽団指揮者 | 152 |
| 5 | 故郷に錦 | 157 |

第五章 早稲田大学四年生前期

- | | | |
|---|---------------|-----|
| 6 | 明治大学の攻撃 | 162 |
| 7 | 吹奏楽団指揮者の選定 | 166 |
| 8 | 応援部幹部就任 | 172 |
| 9 | バトントワラーズの誕生 | 176 |
| 1 | 吹奏楽団の改革 | 182 |
| 2 | 東京六大学応援団連盟 | 180 |
| 3 | 「人生劇場・口上」デビュー | 190 |
| 4 | 青島さんファンクラブ | 195 |
| 5 | 吉永小百合を思慕する会 | 197 |
| 6 | 早稲田大学浜松演奏会の準備 | 201 |
| 7 | 応援アルバイト | 207 |
| 8 | 応援部夏合宿 | 209 |
| 9 | 浜松演奏会当日 | 214 |

第六章 早稲田大学四年生後期

- 1 「人生劇場・口上」の錬磨 258
- 2 東京六大学野球秋季リーグ戦 260
- 3 バントワラーズの進展 264
- 4 青山のパラー 266
- 5 早慶戦前夜祭 271
- 6 留年の決意 275
- 7 秋の早慶戦 281
- 8 早慶戦後 293
- 9 応援部吹奏楽団第十四回定期演奏会 297
- 10 吹奏楽コンクール 226
- 11 見付天神裸祭 230
- 12 浜名湖のアサリ採り 244
- 13 早稲田大学浜名湖大水練潮干狩大会（浜名湖ツアー） 250

特別寄稿 「青島先輩と自分、そして浜名湖ツアー」……………花井和夫

青島秀樹氏経歴

早稲田と「人生劇場」

プロローグ

我が胸の　燃ゆる想いに　比ぶれば

煙は薄し　桜島

朗々と響きわたる声に、会場に居合わせた百名を超える参加者は息を呑んだ。

真つ暗とさえ言えるくらい照明が落とされた会場の、舞台の真ん中でスポットライトを浴びたその男は、年季の入ったよれよれの早稲田の角帽を被り、袴をつけた着物姿。腰には手拭いを下げ、足元は朴^{ほお}歯の下駄……昔日の早稲田の書生さんを演じているのだ。

この男は「本気で」演じている。その「語り」を、おのれのすべての「思い」をそこに
いる参加者たちにつけていた。

独りよがりな自己陶醉ではない。居合わせたすべての者が、その語りの世界に引き込まれていった。

口上のクライマックス

「浮き立つ雲に誘われて 一人旅立つ東京の 学びの庭は〜早稲田なり!!」

その瞬間、抑えていた気持ちを抑えられず、思わず涙する者さえいた。

しかし、舞台中央、目深まぶかに被った早稲田の角帽ひさしの庇ひさしの奥、頬を伝う一筋の雫しずくに、観客の誰一人気が付くことはなかった。

二〇一七（平成二九）年六月一八日、浜松市のホテルコンコルド浜松、年に一度の遠州しゅうちゅうもんかい稲門会総会懇親会でのことである。

遠州稲門会とは、浜松市を中心とする早稲田大学校友会組織のことだ。その集まりであるから、早稲田の歌、そして「人生劇場」などは、会場にいる皆が知っている歌である。俗に「早稲田大学第二校歌」とも言われている。

学生時代に、所属していた部やサークルなどで、この「人生劇場」を歌った思い出を持つ早稲田OBは多い。そして、この「人生劇場」を歌う際は、「口上」をつけるのが慣わしとなっている。飲み屋の二階で、一同輪になり灯りを暗くし、リーダー役の学生が口上を語り皆で歌を歌う。実は私自身も口上を語った一人である。

そのようにして「人生劇場・口上」は、早稲田の学生によって生み出され、連綿と語り継がれてきたのであるが、実は「正調」というものはない。

この日、この口上を語った青島秀樹は、一九七九（昭和五四）年の遠州稲門会結成以来、この日に至るまで総会では毎回欠かさずこの「人生劇場・口上」を披露してきたという。

巷に「人生劇場・口上」と言われるものは数多いが、その台詞、言い回し、真剣さ、すべての要素において、「正調」と評価できるものは、唯一この「青島流口上」であろう。

こんな一文がある。

「少なくとも応援部に籍を置いて練習した者が振るタクトは、腹の底、心の奥底、全身からのタクトでなければならぬ。振る腕、指の先に早稲田精神がほとばしる気迫がなければならぬ。誰でもが真似の出来る指揮であってはならぬ。さすが応援部だと思わせるものではないらぬ」

故今井隆義氏（一九四六年商学部卒）が、一九九二（平成四）年に早稲田大学京都校友会報に寄稿した文章だ。今井氏は一九四三（昭和一八）年一〇月一六日、早稲田戸塚球場で

行われた、学徒動員に伴ういわゆる「最後の早慶戦」で、早稲田大学校歌の指揮をした人である。

その後、海軍航空隊に入隊。命ながらえて帰還し、敗戦でうちひしがれていた早稲田大学にあって、応援部の再建、そして大学の活力を取り戻すために尽力した先達である。

そして、一九四〇（昭和一五）年から数十年にもわたって振り続けた「早稲田大学校歌」の指揮を、体力の衰えを理由に、この年（一九九二年）を最後とした際にその気持ちを表明した文章である。

早稲田の卒業生は、とにかく早稲田の校歌・応援歌が好きだ。関係のない人から見れば、甚だ異常に映るかもしれない。

早稲田OB OGの集まりはもちろんのこと、校友会や稲門会いんもんかい総会の最後に「校歌」を歌うのは当たり前、結婚披露宴で新郎新婦を囲んで校歌・応援歌を歌う卒業生も多い。「都の西北……」で始まる「早稲田大学校歌」が、日本一有名な「校歌」だと言われるのもそういういったことに起因しているだろう。

その指揮をするのは、応援部のOBが多いのだが、その応援部のOBであっても、こんなにも真剣に取り組んできた人間は数少ないかもしれない。

秀樹もそんな一人であろう。今井氏と同じくとにかく大真面目。校友会総会などの才

フィシヤルな会で「校歌」の指揮、あるいは「人生劇場・口上」を依頼された場合は、その務めが終わるまでは宴席であつても酒は口にしない。前に出て指揮をする人間が「酔っ払い」ではないけない、さすが応援部と言われる指揮、あるいは口上を披露しなければならぬと思うからだ。それでこそ会場にいる皆さんが、心の底から「早稲田である喜び」を感じてもらえると思う強い信念からだ。

第一章
少年期



1 誕生と両親

青島秀樹は一九五五（昭和三〇）年九月三〇日、静岡県磐田市見付いわた みつけで生を享うけた。

父は「靖一せいいち」、母は「よ志よし」。両親は結婚した際、揃そろってよ志の姉、つまり秀樹の伯母の養子となった。伯母は戦争未亡人で子供がなかったからである（娘が一人いたが小さい頃亡くなっている）。

つまり、「青島」というのは伯母の嫁ぎ先の姓なのである。ちなみに、父親の旧姓は「鳥居」、母親の旧姓は「渥美」という。

伯母は磐田市で美容室を営んでいた。遠州地方には、今でも伯母の店から巢立なるとった美容師がたくさんいるという。その伯母を頼たのんで母も美容師になった。住み込みの美容師が何人もいて、当時はとても繁盛はんせいしていた。

父は印刷業をやっていたが大した稼ぎになるわけではない。自分の晩酌代ばんしやくだいくらいを稼かせげればよかったのだが、それでもよく働はたらいていた。多い時には三人も雇よっていた時期があるという。

文字どおりの「髪結いの亭主」なのだが、一〇〇%そうかという、ちよつとちがうら



父靖一、母よ志と(秀樹5歳の頃、河口湖畔にて)

しい。長兄直樹の言によれば、「ヒモになれない真面目さが父にはあった」という。

「髪結いの亭主」はむしろ近所の仲間たち。そういう人たちが毎日毎日青島家に押しかけ、お茶を飲んでは次のお店に出かけていく。それを見ていた長兄は、「ああはなりたくない」と子供心に思っていた。「父は、商売は下手だったが気の小ささが幸いしたのだろう」と兄は述懐する。

日本がまだ貧しかった時代である。大正生まれの世代は、多くの家庭が夫婦共稼ぎだった。

青島家の家計も母の稼ぎが支え。学資その他、生活費のほとんどを母に頼っていた。

父は餅をのどにつまらせて、二〇〇一年に七九歳で亡くなった。

そのとき、母は、「あんたら三人を育てるのに、私がすべて金を出した。生涯お父さんからお金をもらったことがない」と言いつつ、思いがけず保険金がおりてきたので、「いい退職金を最後にお父さんからもらった」と、感慨を込めて漏らしたという。

2 幼少期

幼少期、秀樹の記憶に一番残っているのは、女の子の着物を着せられたこと。お化粧されて着物を着せられ、髪飾りまでつけさせられたという。長男の直樹も幼稚園に上がる頃まで髪を茶色に染められていた。

秀樹は三人兄弟の末っ子である。上二人が男の子なので、三番目は女の子を期待されていた。母には美容室の跡継ぎを望む気持ちもあったと思われる。自宅で秀樹が生まれた時、長兄が「なんだ、また男か」と呟いた^{つぶや}というが、そのときの家族の気分を示す象徴的なエピソードであろう。

美容室なので、女の子であれば従業員も含めてみんなで可愛がることができる。そうしたいと望む店のムードもあったかもしれない。

美容室は結局、次兄の茂樹が継ぐこととなる。現在、その子息も東京で美容師として修業して帰ってきた。いずれ四代目となる美容師が実現するであろう。

秀樹の幼少期の家は大所帯だった。家族だけでも両親と義理の祖母、男三兄弟の六人。それに美容師として住み込んでいる若い女性たちも一緒なので、ご飯時は大騒ぎである。

母は店で仕事していたのでとても忙しい。朝から晩まで仕事に追われていて、家事をする時間はなかった。そのため、住み込みのお手伝いさんがいた。

秀樹の子供時代は、そのお手伝いさんが面倒をみてくれて、学校の参観日も、義理の祖母か、そのお手伝いさんが母に代わって出席してくれたという。

3 父の思い出

家庭内は女性の人数が多い分、その力が圧倒的に強かった。父親と子供三人は、少数派の男同士というわけで、とても仲が良かった。

青島秀樹氏経歴

一九五五（昭和三〇）年九月三〇日、静岡県磐田市見付生まれ。浜松市中区鳴江在住。静岡県立磐田南高等学校から早稲田大学社会科学部卒。

- ・早稲田大学心援部での四年度役職（昭和五二年度）
- 副将、吹奏楽団責任者、新人監督、バントトワラーズ（現在のチアリーダーズ）初代責任者、東京六大学応援団連盟委員、東京都大学吹奏楽連盟理事
- ・早稲田大学遠州人会（学生稲門会）設立メンバー、第二代幹事
- ・早稲田大学吉永小百合を思慕する会設立メンバー、初代政調会長

「ヨーロッパ珍道中」から帰ってきた大学五年生の秋に、学生の分際で代議士秘書となる。地元を走り回りさまざまな選挙を経験する。

その後は、浜松市内の不動産管理会社へ就職、マンションやオフィスビル事業の立ち上げの仕事に携わる。

バブルが崩壊し、独立を余儀なくされた一九九四（平成六）年、ゼロから調剤薬局事業を脱サラで立ち上げる。経営者として、およそ二〇年の間に、三店舗、従業員三〇名ほどの規模に

まで成長させたが、個人経営の限界を感じ二〇一五（平成二七）年に大手薬局チェーンへ事業譲渡を決断。

不動産デイベロップターの「辰巳屋」を立ち上げ、現在はその代表を務める。「辰巳屋」の名称は、小説『人生劇場』での青成瓢吉の生家の名である。

早稲田大学校友会関係（現在）

- ・早稲田大学校友会代議員
- ・早稲田大学校友会静岡岡支部 幹事長
- ・遠州稲門会副会長

一九九九（平成一一）年から今日に至るまで遠州稲門会が毎年開催している「早稲田フェスタin遠州」では、初代実行委員長。

「早稲田フェスタin遠州」のイベントの一つとして、二〇〇三（平成一五）年以降計六回開催している「早稲田大学浜松演奏会」（応援部リーダー、吹奏楽団、チアリーダーズによる三位一体のステージ）では、すべて実行委員長を務めた。

*早稲田フェスタin遠州…遠州地区の市民の皆様には早稲田を紹介するさまざまなイベントの開催

早稲田大学浜松演奏会、早稲田大学野球部員による早稲田野球教室、ヤマハスタジオムを使ったサッカー・ラグビーフェスティバル、早稲田大学図書館蔵展、夢追いかけて作文

コンクール、記念講演会、ワセダバスケットボール教室、早稲田大学サテライト講座、早稲田子供一日博士体験、ワセダ子供パソコン教室、早稲田短歌講座、短歌コンクール、早稲田俳句教室、ワセダヨット教室、現役学生による進学ガイダンス、戦地に逝った早稲田のヒーロー松井榮造展、大西鐵之祐と早稲田ラグビー展、野村万作の世界、等々

地元の早稲田大学校友会組織である「遠州稲門会」には、一九七九（昭和五四）年の設立に参加、翌年には事務局長となる。

遠州稲門会が、全国の稲門会の中で「遠州稲門会あり」と言われるほど注目を浴びる稲門会となったのには、青島秀樹氏の存在なくては語れない。二〇一六（平成二八）年六月までは幹事長を務め、現在は副会長の一人。

遠州稲門会の総会の席では、設立以来今日に至るまで「人生劇場・口上」を披露し続けている。近年では、静岡県稲門祭をはじめ、県内外の各稲門会から引っぱりだことなっている。

早稲田大学台湾校友会からは、総会懇親会の「早稲田のうた」コーナーを依頼され、二〇一一（平成二三）年以降毎回自費で参加。「人生劇場・口上」のみならず、早稲田のうたの伝道者として、「早稲田大学校歌」や「紺碧の空」の指揮もこなし、早稲田である喜びを台湾の皆様にお届けしている。おのれの満足ではなく、早稲田の皆さんを応援したいという、まさに「生涯応援部」。

永年にわたり「人生劇場・口上」を語り続け技芸の錬磨に努めてきたこと、そしてまた

近年その成果が実り、格段の向上が認められると共に独自の境地を拓いたとの評価に至り、名古屋女子大学林和利教授が発起人となり、二〇一五（平成二七）年二月二十八日に早稲田大学大隈会館にて「『人生劇場』口上青島流初代家元認定式」が開催され、初代家元に就任した。家元就任後は、その活躍の場が格段と広がっている。

青島秀樹氏連絡先 jinseigekijou2015@gmail.com

●家元としての「人生劇場・口上」ステージ（「人生劇場」口上青島流家元認定式」以降）

- ・静岡県稲門祭 二〇一五（平成二七）年六月二〇日
- ・早稲田大学校友会滋賀県支部総会 二〇一五（平成二七）年六月二一日
- ・遠州稲門会総会 二〇一五（平成二七）年六月二八日
- ・早稲田大学京都校友会夏例会 二〇一五（平成二七）年八月二三日
- ・一九七八年次稲門会総会 二〇一五（平成二七）年一月八日
- ・愛知県西尾稲門会総会 二〇一六（平成二八）年二月七日
- ・早稲田大学校友会奈良県支部青垣会 二〇一六（平成二八）年四月一六日
- ・東京都大田区文士村「飄々祭」二〇一六（平成二八）年六月二一日
- ・早稲田大学校友会愛知県支部総会 二〇一六（平成二八）年六月二一日

- ・静岡県稲門祭 二〇一六（平成二八）年六月一八日
- ・早稲田大学校友会静岡県支部 二〇一六（平成二八）年八月三一日
- ・遠州稲門会有志による「青島秀樹伝」出版祝賀会 二〇一六（平成二八）年一〇月二五日
- ・大田稲門会新年会 二〇一七（平成二九）年一月二八日
- ・「笑い文化研究会」桂文治、桂右團治師匠との打ち上げ会 二〇一七（平成二九）年一月二九日
- ・「人生劇場」の集い 於愛知県西尾市 二〇一七（平成二九）年二月五日
- ・静岡市稲門会総会 二〇一七（平成二九）年五月一二日
- ・サイゴン稲門会 於ベトナム・ホーチミン市 二〇一七（平成二九）年五月二〇日
- ・静岡県稲門祭 二〇一七（平成二九）年六月一〇日
- ・遠州稲門会総会 二〇一七（平成二九）年六月一八日

●青島秀樹氏著作

「ヨーロッパ珍道中記」

早稲田の大学五年生二人が、下駄に書生の着物姿といういでたちでヨーロッパを珍道中した旅行記。

月刊『アイドマ』一九八二（昭和五七）年一号～一九八三（昭和五八）年一号に連載。

「静岡県立見付中学校・磐田南高等学校 校歌・応援歌ものがたり」

磐田南高等学校（旧制見付中学校）の校歌や応援歌が作られた経緯、携わった人々の想い、建学の精神などを、丹念な取材、調査により明らかにした。

第六九回見中・磐田南高等学校同窓会総会実行委員会発行。一九九五（平成七）年八月刊。

❖著者略歴

林 和利（はやし・かずとし）

1952年 兵庫県篠山市に生まれる。

1971年 兵庫県立篠山鳳鳴高校卒業

1976年 早稲田大学教育学部国語国文学科卒業

1978年 早稲田大学大学院文学研究科博士前期課程（修士）修了。

1999年 早稲田大学より博士（文学）号を授与される。

東洋高校教諭、鹿児島女子大学専任講師・助教授、名古屋女子大学短大部助教授・教授を経て、現在、名古屋女子大学文学部教授。

早稲田大学校友会代議員・名古屋稲門クラブ理事・愛知県稲門教育会副会長。

「人生劇場」口上青島流家元認定式発起人代表、青島流後見人。

著書として、

『古今東西ニッポン見聞録』（風媒社、2014年）

『人間国宝野村万作の世界』（明治書院、2010年）

『なごやと能・狂言——洗練された芸の源を探る』（東海風の道文庫、風媒社、2007年）

『能・狂言の生成と展開に関する研究』（世界思想社、2003年）

など多数

口上 人生劇場

青島秀樹伝

二〇一七年二月二三日 初版第一刷印刷
二〇一七年二月一八日 初版第一刷発行

著 者 林 和利

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

〒一〇一〇〇五一

東京都千代田区神田神保町二二三 北井ビル

電話 〇三三二六四一五二三四

FAX 〇三三二六四一五二三二

web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 〇〇一六〇一―一五五二六六

装 幀 宗利淳一

装 画 藪野 健

印刷・製本 中央精版印刷

組 版 フレックスアート

©HAYASHI Kazutoshi 2017 Printed in Japan.

ISBN978-4-8460-1659-3

落丁・乱丁本はお取り替えいたしません。